

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

授業担当者 紙谷喜則

所属/職名: 農学部/准教授

氏 名: 紙谷 喜則

授業科目名	食料環境システム学Ⅲおよび 特論Ⅱ
研修先(国・地域) 滞在地	タイ・バンコク、コラート、アユタヤ バンコク市内、ラチャナカシマ、アユタヤ
研修期間	平成 29 年 8 月 27 日～9 月 3 日

〔研修の成果〕

大学院授業(品質マネジメント、食の安全研修など)で習った食品の取り扱いに関する科学的視点から、今後、伸び行く可能性のあるタイの食品衛生管理手法(HACCP、GMP)をタイの学生と一緒に受講した。昨年の反省から日本語のわかる講師にお願いし、英語と時々日本語による解説を行ったが、初日、2日目は英語の聞き取りとタイのペアとのコミュニケーションがうまく機能せず、理解が難しい様子であった。最終日はデンブン工場での内部監査の実施しているところを見学させていただき、その後、工場見学により内部監査で行われていた討議を具体的に知ることができた。また、デンブン工場でも日本語のわかる品質管理(日本在住 10 年)講師であったため、日本語で直接質問したりすることもでき、HACCP の理解は深まった。

この授業では、日本語で修得したHACCP、GMP を英語により知識の定着を目指し、今後、食品流通のグローバル化を見据え、英語で品質管理ができる人材育成も兼ねている。そのため、タイのラジャマンガラ工科大学の学生とペアになり、ワークショップ(討論・発表)を行うなど、英語力が必要であったが、タイの学生と同等かそれ以上の英語力があることが判り、お互いの意思疎通を辞書で行うなどコミュニケーション力も試された。

英語力に長けた、日本学生がリードしワークショップを終え、学生も英語力の必要性を実感した。

また、帰国後も、タイ学生とプライベートでもメールで連絡しあうようになり、日常的に英語を使う生活になっている。

成果のまとめ

1. 学生が英語の必要性を再認識し、英語を学ぶ・実践会話に機会を求めようになった。
2. 海外の学生と交流することで、同じ世代の学生としての親近感が湧き、外人が遠い存在では無くなった。
3. 食品安全規格を習い、内部監査員資格(ラジャマンガラ工科大・鹿児島大学認定)試験に合格した。
4. HACCP,GMP のマニュアルを英語で作成することができ、内部監査の手順を英語により理解できた。
5. 事後講習にて、マニュアル作成要領を再確認し、地域食品産業への協力ができる人材になる可能性が高くなった。

〔今後の課題〕

初日は深夜1:30に到着して、バスに乗り5時間移動後ホテルで休憩し、10時から授業を開始したこともあり、疲労感があった。2日目からはタイの学生と食事に出かけるなど夜遅くまでホテルに帰らない学生もいて学生間交流も進んでいたと思われた。3日目の工場見学で朝の6時に出発して5時間移動後、デンブン工場を3時間程度見学した。帰りのバスではタイ学生とバスを一緒にして会話する機会を設けたが、一部の学生しか盛り上がっていないようであった。そもそものコミュニケーション能力差が問題であるため、コミュニケーション能力開発も必要であると

感じた。アユタヤでは、民宿(大農家)にて20名が大部屋で就寝した。周りには畑、田んぼしかなく都会の喧騒を離れ、古き良きタイの生活を垣間見られた。しかし、民家でありホテルとはアメニティ、設備で大きな差があり、一部の学生からは「無理」との訴えがあった。外国ではもっとひどい環境で生活している人がいることをもっと認識して、たった1泊ぐらい我慢し、楽しむぐらいの大らかさを持つことが期待される。バンコク(都会)市内では、何不自由なく日本と変わらない食事・生活ができた。学生からはバンコクの滞在を延ばして欲しいとの要望もあったが、都会での生活は海外をすることにはならないため、今後もこのプログラムで実施することを考えている。

タイの学生との交流が継続的に進められるように、今度は、日本(鹿児島)への交換留学などを行える資金を準備できると良い。

日本から留学生を3-6か月先に送り込んで、交流の土壌を作っておくと、田舎での生活をアシストできるため、留学制度を使えると良い。

今回の研修にはタイで8か月留学した小森(大学院2年)が昨年に続き参加してくれたため、夕食など研修後の自由時間は彼を中心にマーケット見学などを活発に行うことができた。彼の費用は食料環境システム学研究室費から支払ったが、18名の学生を一人の教員で管理するには難しいので、教員に対する補助、TAなど予算を取り、ガイドとして同行してもらえ費用も準備して頂けると助かります。